見えにくさへの支援②

～援助依頼について～　※事例は個人が特定されないよう、複数の事例を組み合わせるなどの改変をしています。

小学校のある弱視級に在籍しているＡ君の話です。Ａ君が交流級での体育の授業を受けているときに、弱視級の担任の先生が周りで様子を見ていたそうです。グラウンドで体を動かしていたところ、Ａ君がつまずいて転んでしまったのですが、立ち上がった際に周りにいた子どもたちが駆け寄って、服についた砂埃を払ってあげていたそうです。大丈夫だった、などと声をかけてもらっているＡ君は、周りの子たちの声かけにもぶぜんとした表情で返事をしなかったそうです。その様子に周りの子たちは「え、何？ありがとうぐらい言ったら。」などと口にしていたそうです。確かに、担任の先生から見ても、いつものＡ君の様子とは異なっていたので変だと思い、後で理由を尋ねたそうです。その時のＡ君ははっきりとは理由を答えなかったそうですが、しばらく経った後で、自分から次のように言ってきたそうです。

彼の言葉はぶっきらぼうで、誤解を与えてしまうような言い方かもしれません。以前の彼なら間違いなく「**ありがとう**」と笑顔で返していましたが、転んだ恥ずかしさもあってか、世話が必要な“できない子”と思われたくないという気持ちがあったのでしょう。

先生から見ると、手伝いが必要な場面があるのですが、Ａ君に“自分はできるんだ”というプライドが芽生えてきたと捉えて、これからは、極力必要な支援が何かＡ君に尋ねたり相談したりしながら行っていくようにしたそうです。

見えにくい子どもへのサポートを考えるうえで、しばしば“援助依頼”という言葉がでてきます。これは自分が必要な支援を周りにお願いすることです。周囲の友達などに対して必要なサポートをお願いするということは、自己理解を進めるためにも重要な取り組みの１つとなります。

援助を依頼するという行為は、人や内容によっては劣等感を覚えることもあるでしょう。また、Ａ君のように自分でできるんだから世話を焼かれたくないと感じるような年頃になってくると、自分と他者の違いを認識したり、自分とは何かという問いを考えたりしはじめます。そのため、援助依頼の方法を身につけるには、子どもの心の状態（プライド）に配慮しながら接していきます。

見えにくさのある子どもの中には、自分の見え方が他の多くの人の見え方と異なることに気づいていない場合もありますが、先生が何気なく「黒板見えてる？」と授業中に気遣ってかけた言葉も、本当ははっきりと読めないにもかかわらず、周囲を気にして見えていると答えてしまう場合もあります。表面に現れた子どもの言葉だけにとらわれることなく、ノートにきちんとかけているかなどの視点で本人に必要な支援を確認し、黒板の内容を読み上げるなどすると、クラスみんなが板書しやすい環境になります。